

## 「対話と承認」に関連するメールの抜粋と補足

作成者：想田瑞恵

2011年12月7日～2012年3月6日

2011年12月7日

〈想田〉

檜垣のページ「倫理学年報 第61集報告文」について確認したいことを並べました。

○第5段落6行目（再校は9行目）

「共同体的なコミュニケーション作法」についてですが、「村落共同体的なコミュニケーション作法」のように、限定したほうが良いのではと感じました。「共同体」にも種類があり、「世界市民」という共同体ならむしろ「対決型のコミュニケーション能力の向上」が求められると思うからです。

○第5段落9行目（再校は15行目）

「この防御は面子は保っても」は、「一時的に」や「刹那的に」のような制限が欲しいと思います。刹那的にしかその集団の一員として承認されない（面子が保てない）からこそ、「状況によっては自殺にまで追い込みかねない」からです。

以上です。

第5段落の「個人の自由・権利意識の浸透とともに高まった『個性』志向は、表面的な社交性とは裏腹に内閉化し、真にオープンな〈対話〉を忌避してプライドを守る傾向をもつようになってしまった」というまとめ方に、とても魅力を感じました。

2012年1月11日

〈想田〉

檜垣のページ「幸福と自尊心ーカント倫理学と現代ー」を読みました。

長くなってしまいましたが、気づいたことをまとめました。

よろしければ御確認ください。

○第5章「〈対話〉の困難と自尊心」

・p.10 土井先生の引用(26)について

→引用箇所の続きの「彼らにとっての個性とは、人間関係の函数としてではなく、固有の实在として感受されているのです」も、引用にいれたほうがよいと思う。引用された部分だけでは、なぜ他者の承認が必要なのかがわかりにくい。生まれ持ったものが自らの個性だと信じているなら、他者からの評価や承認などどうでもいいという、確信犯的ひきこもりをすればいいようにも思える。ところが、それができず、他者の承認を必要としているのである。その理由は、「個性的な自分の根拠を身体感覚に見出そうとしている」(32)、あるいは、「自らの内発的な衝動こそが個性の根拠であると思い込んでいる」(37)からだ。そうした衝動を得るためには、「今」という時間が常に誰か(何か)との予定で濃密に埋めつくされていなければならない。ゆえに、つるむための誰かやイベントを引き起こしてくれる誰か(仲間・トモダチ)が必要となってくるのだ。

これだけでも自分や関係性に一貫性も安定性を見出せず常に不安定な思いをするには十分だが、問題はそれだけではない。現代の若者にとって、個性とは「固有の实在」(26)、あるいは、「人間関係の中で培っていくものではなく、自己の深遠に発見される実体、大切に研磨されるべきダイヤの原石」(27)、あるいは、「本源的に自己に備わった実体の発現過程」(28)である。こうした個性が認められることで、彼らの自尊心は確保されるのだ(これが第5章冒頭の「自尊心のあり方の変化」だと考える)。そのため、自分の個性(特別さ)を実感できず「もしかしたら自分には個性などないのではないか」と思うことは、まさにカントの言葉で言うところの、「自己自身の目で見て生きるに値しない」という事態なのである。

彼らは、自分に生きる価値を認められず自尊心の欠片もない状態に陥る危険と、常に隣り合わせで生きている。そうした脅迫的な不安から少しでも逃れようと、目に見える範囲の身近で手近な他者に自分のことを絶え間なく承認してもらうことを要求する。そうした承認は「対立回避の原則」に基づく表層的なものであり、承認してもらう仲間やトモダチも「イベントを引き起こすための単なる手段」であるから、彼らに承認されても得られる自己承認感や自己肯定感は薄い。しかも、承認される自分にしても、「承認されるべき自分のふるまいや態度を、言葉によって構築された観念や信念に根ざしたものではなく、言葉以前の内発的な衝動の発露ととらえ、自らの行為に言葉による根拠を与えることに然したる意義を見出していない」(32)。つまり、承認(肯定)を強く求めているのだが「承認(肯定)とはその場限りのものである」とも認識しているため、自己承認感や自己肯定感はこの意味でも薄く、結果個別的で絶え間ない肯定を常に必要とすることになる。それがなければ「人として崩れ落ちてしまう」のである。

このように考えると、p.9の引用「友達への過剰な配慮は、他者への配慮ではなく、自己承認がほしいという自己への配慮の産物である」(48)や、p.10の引用「お互いに脅迫的に依存しあわねば自らの存在確認さえ危うい子どもたち」(61)や、p.10の引用前最後の行「本人を自殺に追い込みかねないほど自己評価を下げてしまう」が、つながりやすくなると思う。また、こうした理解は冒頭の「対話を深めることが困難になった」にもつながる。同じ一つの真理を目指せば自分の生きる価値である個性(特別さ)は無くなってしまい、自らの行為に言葉による根拠を与えることに然したる意義を見出せず、「本質的な意味では言葉の介在を必要としない関係」(54)しか作ってこなかったのだ。対話が苦痛であるのも当然かもしれない。

## ○第6章『「傘を取られたことを憤る」という理性の事実』

### ・p.13 冒頭

→第5章のまとめとして述べられていた「他者とかかわりかたを変えるしかないだろう」とこの章とのつながりに触れたほうがわかりやすいと思う。これまでの記述を踏まえると、我々(現代の日本人)は、どのような他者とかかわりかたを目指せばいいのか。それは、「本質的な意味では言葉の介在を必要としない関係」ではなく、つまり、自分や他者の言動を「内発的な衝動の発露」としてとらえ利他的に承認する共依存関係ではなく、「自分や他者の言動を、言葉によって構築された観念や信念に根ざしたものとして、一般性をもって承認しあう関係」である。これを実現するためには、言葉への、すなわち、理性への信頼の回復が不可欠である。トマス・ネーゲルが説明する「理性の事実」がその第一歩になると考える。

## 2012年1月12日

〈想田〉

後半のつながり、すなわち、「大切に研磨されるべきダイヤの原石・自分の生きる価値」としての個性観が引き起こす問題と、「理性の事実」による救いとの関連について、考え中なことをまとめました。よろしければご確認ください。

現代の若者が持つ「ダイヤの原石・自分の生きる価値」としての個性観から生じる脅迫的な不安とは、具体的にどのようなものであるのか。これについて考えることで、彼らにとって「理性の事実」が救いとなることが分かるだろう。彼らの持つ脅迫的な不安の一番の原因は、彼らが自分の語る言葉を自分で信じていないこと(嘘つきであること)に在ると考える。善悪の実感が薄い彼らにとって、賞賛や感謝の対象となる言動とは、「個性的な言動」だ。つまり、他者がしない、自分しかしない特別な言動である。そうした言動によって、「自分も特別な存在だ・自分にも居場所がある(承認されている)」と実感できるのだ。自らの言動に特別さ(奇抜さ)を演出しようとするのも、そのためだろう。ところが、彼らは自分が誉め言葉や感謝の言葉の対象となったとしても、その言動を自分で信じておらず、また、相手のそうした言葉も実は信頼していない。今、誉められたり感謝された言動は、自分が意志してそうしたわけではなく、偶然生じたものだとは認識しているからである。相手の誉め言

葉や感謝の言葉にしても、偶然得られたものなのだ。自分は、その場の空気をたまたま読むことに成功し、かつたまたまその場の空気に適切な言動をとれたから、たまたま賞賛や感謝を得ることができた。しかし、意志の結果ではなく流れでそうっただけなので、次も同じように振舞えるとは限らない。それどころか、同じ相手であっても今回とは正反対の言葉を語ることが、その場の空気の「正解」かもしれないのだ。自分の言葉にしても相手の言葉にしても、その都度変わるものを信じられるわけではない。

こうした個性観を持っていれば、対話によって考えをつきつめようとしなくても当然と言える。つきつめようにも自分の考えの根拠・「理」由となるものを持っていないのだから。ゆえに、彼らは、言動に一貫性がなく(再現不可能で)常に不安定な状態にある。それならば、自分の語る言葉を少しでも信じることであれば、自分の言葉は自分の意志によるものなのだと実感できれば(自分の言葉に責任が持てれば)、自分の言葉に信念(自己立法したもの)による裏づけや支えを確かめることができれば、かなり状態は改善されるはずだ。「今は仲良くできていても数秒後には嫌われているかもしれない」という不安や、「前回会ったときには仲が良かったけれど今は嫌われているかもしれない」と他者に会うことを恐れる気持ちから、少しは解放されるだろう。

つまり、今一番必要とされているのは、「何らかの法が実在するという意識、その法に支えられているという意識」だと考える。法を意識し善悪の実感を強く持つことができれば、自尊心は道徳的行為に根ざしたものとなる。「理性の事実」は、法の意識を示すだけでなく、自分にも道徳的行為ができるということ、すなわち、誰もが何をなすべきかを具体的に知っているということを示してくれる。一方で、誉められたり感謝されたりするために行う「空気を読む」という行為は、研ぎ澄まされた判断力と経験が必要で、どうすればよいのか完璧に知らせてはくれない。賞賛や感謝を自分の生きる価値とすること、つまり、幸福を自分の生きる原理とすることは、不完全義務の世界に生きることだ。不完全義務しか知らなければ、空気を読むこと(判断力を研ぎ澄ませること)に、命をかけることになってしまう。有限な人間に可能な完全義務とそれに対する責任(自律)を教え、完全義務に基づいた自尊心のあり方を教えることが必要だろう。檜垣先生は「カント倫理学と現代」のMP3で、「現代の若者に自尊心・プライドを取り戻してもらうためには、何らかの形で真や善に対する信頼、理性に対する信頼を回復することが先決である」や「自己利益中心の自己決定ではなく、何らかの意味での自律、そして自己責任ではなく義務への責任が、今の日本ほど求められている時と場所はない」と述べていた。それに大変納得している。義務と義務の法則を実感させ、自尊心を取り戻すきっかけを与えることができるのが「理性の事実」であるだろう。

## 2012年2月16日

〈想田〉

檜垣のページ「幸福と自尊心ーカント倫理学と現代ー」再校の感想をメールします。  
よろしければ御確認ください。

○14ページ13・14行目(三校は12ページ10行目)「個性よりも社会的に承認されることのほうが自尊心にとっては重要」

→個性を認められることが若者にとっては社会的承認を得られているということなので(だから個性を必死に探す)、「合意」を社会的承認として考えられるか否かがポイントであると思う。そこで、ここでは「個性よりも他者との合意のほうが自尊心にとっては重要」のようにするのはどうか。

※補足〔8・9ページと2月9日(木)西洋哲学史に関連して〕

「昔ながらの共同体的なコミュニケーション作法を中心とした教育が継続されているにも関わらず、他方で欧米の個人主義も入ってきており、個人主義＝個立主義という通年が浸透している」(8)  
「若者たちは個性的であらねばならないと焦り、互いに決して相手を否定しないように細心の注意を払いながら、個性的と見なしあうというアクロバティックなコミュニケーション能力の向上を余儀なくされる」(9)

↓

現代の若者は似非リバタリアンでないかと思う。彼らはリバタリアンらしく普遍的な価値(善悪)を信じず、各人が作った価値を尊重しようとする。普遍的価値を信じなければ対話に意味はなく「合意」が社会的承認として機能しない。(つまり、合意されても承認されたとと思えない。むしろ疎外されたと思う)。ゆえに共通善ではなく「各人が独自に見出した価値(個性)」を「尊重」することが社会的承認である。

ところで、彼らの「尊重」の仕方とは、「互いが独自に見出した価値(個性)をそっとしておく(孤立することでプライドを守る)」というものだ。だが、個性とは「そっとしておかれる」ばかりでは何がそれであるのかはわからない。これは彼らにとって死活問題である。なぜなら個性がなければ社会的承認は得られないからだ。他人と言葉で対立し自己主張するという習慣がない彼らは、「自分には個性がある(自分は価値を作れる)」という実感を持ちにくい。そのため、「個性ある存在(自由な存在)であると承認されること」を、第一の価値として考えてしまうのだ。

こうしたことは、自由ではなく承認が先行するという、リバタリアンではありえない現象である。けれど「尊重」の仕方はリバタリアンと同じ「そっとしておく」なのだ。ゆえに、結局、自分の発言が否定されないことを要求することで自分が個性的だと承認されようとする。「否定されないこと」と「個性的であり社会的に承認されていること」は彼らにとってイコールなので、「あなたの考えは違う」という「否定」(対立)で個性を考える人にとっては、論理がアクロバティックしているように思えるかもしれない。けれど、普遍を信じない彼らにとって、否定されないことは、人間として崩れ落ちないための唯一の砦なのである。何とももろい砦だが。

**2012年2月20日**

〈檜垣先生〉

○14ページ13・14行目について

「個性よりも社会的に承認されることのほうが自尊心にとっては重要」は、共同体中心社会でも言えることとして挙げているのでそのままにしました。

**2012年2月29日**

〈想田〉

檜垣のページ「幸福と自尊心ーカント倫理学と現代ー」三校について気になった点をまとめました。よろしければ、ご確認ください。

・12ページ

「こうしたやり方(対話)のためには合意をめざす基盤となる共通の理性や法のようなものの存在が要求されるであろう。真理や善がそもそもありえないのであれば、合意をめざすことも不可能であるからである」

→「共通の真理や善を想定していなければ合意を目指すことも不可能」というのはわかるが、これまでの論では、「合意によって個性的な自分が損なわれてしまう」や「対立は避けるべきである」という理解を持つ現代の若者の話をしていた。彼らは合意に意味を見出せず、合意を目指そうとすらしていない。そんな彼らに「合意を目指すことが不可能になってしまうから、真理や善はあるはずだ」と言ってもピンと来ないだろう。また「合意を目指す基盤としての理性や法」では彼らにはありがたみに欠けるというか、理性や法が要求される切実さが伝わらないのでは、という気がする。

そこで「こうしたやり方のためには合意をめざす基盤となる共通の理性や法のようなものの存在が要求されるであろう。そうした存在によって、個性という価値が『何が何でも大事なものではない』と気がつけるのである。また、臆さずに…」のようにするのはどうか。

**2012年2月29日**

〈檜垣先生〉

## ・12ページ

ちょっとご主旨が分かりにくいですが、ここでは、合意をめざすための必要条件を確認しているだけです。「自尊心を充実させる」ためには「承認」が「合意をめざすこと」が必要で、「合意をめざすことができる」ためには「共通の真理」が前提される、という関係だと思いますが・・・。「個性という価値が・・・」がここで出てくるのは唐突に思われます・・・。何か自分の関心が強く働きすぎてバランスのよくない表現になってきてないでしょうか・・・。どうも、とくに最後のほうのご指摘は分かりにくくなってきているように私には感じられます。

**2012年3月5日**

〈想田〉

前回のメールにおける5章への意見を補足しました。

「幸福と自尊心」5章「〈対話〉の困難と自尊心」では以下のようなことが確認されたと思っています。

「昔ながらの共同体的なコミュニケーション作法」の継続と「個性重視」の風潮が、「互いの価値観をそっとしておく」という、「個人の尊重」において一番まずいやり方を支配的にしてしまった。結果、安定した承認感と自尊心は奪われる傾向にある。そこで、現代の若者は、刹那的に得られる承認と自尊心(面子)に全てをかけて、「互いの価値観をそっとしておく」ことに懸命に取り組もうとする。しかし、取り組めば取り組むほど、安定した承認感からも自尊心からも遠ざかっていく。

こうした悪循環にいる彼らにとって対話が受け入れがたい営みであるのは当然である。対話によって、彼らにとって唯一の価値(かけがえのない存在であることの証明)の個性が否定されてしまうからだ。「共通の真理を模索しつつ皆が納得できる合意を目指す過程での対立であり、否定である」と言われても、「真理・法・理性」への信頼がほぼ皆無なままでは、対話は無意味どころか有害な行為でしかない。これらへの信頼があってはじめて、「他者と対立してもかまわない」とか「他者との合意を目指しても自己の尊厳が失われるわけではない」などということに気がつけるのである。つまり、尊厳の根拠を個性ではなく法や理性に置くことで、安定した承認感や自尊心を扶養することができ、「対話」にも希望が見出せるのである。

「個性」を「かけがえのない価値・尊厳」として考えていれば、それは何かが何でも確保されねばならないものとなり、悪循環に陥る。「個性は何かが何でも大事なものではない。もっと大事なものがある」と思い至ることが、他者との関わり方を変える第一歩なのである。

そして「思い至る」きっかけとして、次章の「『傘を盗られたことを憤る』という理性の事実」につながります。

この理解の仕方がすでにそうかもしれませんが、前回のメールは特に自分の関心に寄せすぎた偏った表現になっていたと思いました。強調したかったことは、対話が意味を持つ環境では「個性」という価値は消滅すること、消滅しなくてはいけないこと(「他人との違い」というだけならスマップの歌にそこまで煽られません。必死になるのは「個性」が「尊厳」とか「かけがえのなさ」と同じ意味を持つからです。そのため、真理追究に価値を見出すなら、後者の個性観は放棄されなくてはなりません)、何より、消滅してもいいと思えることがどれほどすごいことなのか、ということでした。

思えば、「個性」や「人それぞれ」や「みんな違ってみんないい」という言葉は、私がこれまでに承認を得ようと思えば外せないキーワードでした。けれど檜垣先生から承認を得ようと思えば、そうしたこれまでの私の方針(承認を得るための)を変更する必要があります。私が一・二年生のころ、檜垣先生に「意味があるような発言には思えない」とか「すごいことを言おうとしていない?」とか「無理して他の人と違うことを言おうとしなくていい」などと言われていたのは、方針を変更しきれていないころの、あまりに当然の指摘でした。こうした「承認を先行させる」傾向性とは、結局「嘘つき」の傾向性です。例えば授業中、つつこみ小人は私に言います。「本当はテキストの内容に興味があるからでなくて承認されようとして発言したくせに嘘つき!」。

認められても、褒められても、感謝されても、「上手くいっただけ」という嬉しさはあっても、自分がそうした褒め言葉や感謝に値するとはとても思えない。相手の言葉を信じていないという点で、これほ

ど失礼なことは無いと思います。

やはり嘘は根本悪です。言葉(理性)しか信じられるものはないと分かっているのに、自分でそれを台無しにしている気がしてなりません。正直、最近自分を「嘘つき」と思うのに疲れてきていました。進学でもしたらより疲れて、「引きこもれば、少なくとも他人に嘘はつかなくてすむし、『嘘つき』であると見破られる機会もなくなるだろうと考えて、いずれかつてのように外に出られなくなるだろう」と思いました。そこで、「義務(職務・役割)を果たしていれば、自分が承認に値するものを何も持たないという感覚からは抜け出せるのでは」と、義務も明確な福祉業界への就職を決めたのです。

「嘘つきであると見破られるのが怖い」なんて、ずるい話だと思います。控えめに言っても甘えていきます。どう考えても、自分が嘘つきであることよりも、他人に「嘘つきだ」と言われて嫌われることのほうを恐れていますから。

それでも「嘘つき」は辛すぎるので、どうにかしたいとは思っていました。「考えすぎ」、「気にしすぎ」、「もっと楽に生きなよ」、「肩の力を抜いて」、「自虐的なだけ」などのアドバイス？なら、これまでに山ほど受け取ってきました。けれど、こうした言葉は、基本的に、「素直になりなよ」と同じくらいの傲慢さを含みうる言葉だと思っています。「素直になりなよ」が、「自分のような感じ方・考え方が世間一般に認められる(素直な)感じ方・考え方なのだ」と言っているように、「考えすぎ」などといった言葉も、「普通」や「一般的」を独断で決めているかもしれないからです。というのも、私は「楽に」「自然に」していたら、その人の言うところの「考えすぎな状態」になっていて、私にとってはその状態が(個性を重視し、承認を先行させ、つつこみ小人が多数いる状態が)、「普通」なのです。つまり、「考えすぎ」と言われる方向に傾いていて、「承認を先行させる」傾向性を持っているというわけです。もしかしたら、こうした受け取り方はただの癖みかもしれません。けれど、「もっと楽に生きなよ」などの言葉が私にとって無意味なアドバイスであることに変わりはないのです。

自身の傾向性に抗おうと思えば、自然法則ではない法が必要です。カントや中島義道さんの言う「誠実性の原理」、檜垣先生から教わった「純粹実践理性(そして対話、言葉の文字通りの意味を尊重すること)」が、私の嘘つきの傾向性に抗うための指針となり、はじめての具体的なアドバイスとなりました。その指針を活用できているかは別として、これまで自分が基準としてきたものとは源泉が違う「理性」というものに、ここではじめて出会えたわけです。

繰り返しになりますが、「個性という価値が何が何でも大事なものではない」や「他人と対立しても良い、否定されても否定しても良い」と思い至れることは大変ハードルの高いことであり、「普通」のことではないのです。せつかく5章の前半で若者の個性観と対話の困難さを説いたのだから、「理性や法がいかに未知のものであったか、そうしたものに思い至ることがどれほどすごいことか」をもっと強調してもいいのではないかと、そう思っただけの前のメールでした。先生からの「関心が強く働きすぎている」という指摘はもっともなものとして受け入れつつ、前回の私の意図が伝わればと思います。

## 2012年3月6日

〈檜垣先生〉

第5章で確認されたはずのことをはっきりとまとめていただいたので、自分でも整理ができました。私はそこまで承認欲求を自覚していないので、十分にツボを得た表現になっていなかったのだと思います。この辺のことは、やはり想田さんご自身でまとめられたら、一番いいのだと思います。私は想田さんの示唆を受けて、「なるほどそう考えるといろんなことが合点がいく」と気づかされていったわけですから。

・「対話が意味を持つ環境では『個性』という価値は消滅すること、消滅しなくてはいけないこと」  
→「個性」というものをどう捉えるかによって、「消滅しなくてはいけない」とまで言わなければならないかどうかは変わってきますね。私も比較的最近まで「個性」を「たった一つの普遍的真理」とは対立する側面をもつものと考えていました。このことは、「そうしないこともできる選択の自由」が自分

になれば、自分が自分でないように思われてきたのと軌を一にしていると思います。

しかし、まだ完全に分かったわけではありませんが、そうした「個性」や「自由」は本当の「個性」や「自由」でないような気がしてきています。別に、「悟った」とか言うつもりはないし、狭義の共同体主義者に与するつもりもないので、もっとごまかさずに考え続けますが、別に負け惜しみではなく「個性」の意味を変えてしまうのではなく、単なる「対立の過程で…」にとどまらないような、自分が「個性」という言葉で大事にしたがっていたものをまさしく大事にできる可能性はあると見込んでいます。だから、「個性」よりも～が大事、といったような表現を強調するのは慎もうという感覚が働いていました。

でも、想田さんの表現は、とりあえず今の世において多くの(とくに若い)人たちにうったえかけるものをもっていると思いますので、ぜひ生かしてください。「何より、消滅してもいいと思えることがどれほどすごいことなのか」、このところを、ぜひ想田さん自身で展開して行ってほしいですね。

・「思えば、『個性』や『人それぞれ』や『みんな違ってみんないい』という言葉は、私がこれまでに承認を得ようと思えば外せないキーワードでした。…嘘つき！」

→これ、本当にうまくまとめてくれていますね。そして、「承認を先行させる傾向」が「嘘」につながるという話がやっと分かってきました。私に言えることは、「テキストの内容」と「承認」のどちらが先行するかは本当に紙一重だと思うということぐらいです。そして、実際には私は承認を先行させているのに、その自覚がない嘘つきなのかもしれません。

・「認められても、褒められても、感謝されても… 福祉業界への就職を決めたのです」

→想田さんの選択の理由がもう少し分かってきました。私には、「このすべてが嘘でも値するものはある」と直感するということぐらいしか今は言えません。

・『『考えすぎ』、『気にしすぎ』、『もっと楽に生きなよ』…私にとっては無意味なアドバイスであることに変わりはないのです」

→ここは本当にそうですね。「素直になりなよ」「もっと楽に生きなよ」ほど無神経な言葉はないと思います。この点は強く同感です。しかし、それと同時に私は「普通」に生きることにそれなりに満足を見いだせる幸運な人間に生まれついています。だから、想田さんや中島さんほどの気持は分からないかもしれません。でも、それも仕方のないことですね。